

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 サガン『悲しみよ こんにちは』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 49 回のツイキャス読書会の課題図書は、サガンの『悲しみよ こんにちは』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

悲しみよ、こんにちは Bonjour tristesse

フランソワーズ サガン 読書感想文

事の次第を知っているのは、セシルだけ。

この話は「過ちの告白」である。ただし何故だか本人が悪びれていないからこの時点では懺悔ではない。

良心の呵責があったはずなのに、夏の恋にかまけて、その計画がもたらすだろう事の重大さを見過ごし、結果、後悔と共に大人になってゆく。その苦い涙の感情をセシルは「悲しみ」と呼び、このときはじめて知った感覚だと告白している。「悲しみ」を知ったことは大人へ成長したとも言えるが、その代償として引き受けた感情はあまりに重たい。

自由が欲しくて望んだ結果、セシルは深い闇を知った。

一人の人格を、アンヌを葬ったせいで、孤独を知った。

人は一人じゃ生きてゆけないのだから、相手を許容し寛容になり、個を見失わない共存をずっと求めながら恋をするのじゃないかと思う。アンヌの恋が、自分の死で終わってしまうなんて、理知的な美しい女性が辿った悲劇の結末があっけない。いくら素敵に見えてもプレイボーイとは迂闊な恋はするものじゃないっていう教訓なのだろうか。

そしてセシルが望んだ自由とは。

17歳も40歳も、毎日の生活は気ままだけど精神的に不器用な親子は、恋という麻薬がなくては死んでしまう。

プライドが高く華やかな世界に住む業界人だから、なお一層のこと。

享樂的な生き方の代償として自由へ逃走したセシルは、父親という共犯者と共に、アンヌが予言した悲しい末路の人生を歩むのだろうか。

作者のサガンが18歳でペンを取ったとき、自分の運命を予言しながら文章へ落とし込んでいたとしたら、この小説の快活さはなんだろう。明瞭な形容詞と潔い修飾語のスピード感は、実際にスポーツカーで荒っぽい運転をしていたというサガン本人らしさ。他の作品も順番に読んでみたいし、こんな作家が同時代にいたらすっかりファンになっていただろうと思う。

(おわり)

「悲しみよ こんにちは」感想文

サガンの「悲しみよ こんにちは」を初めて読んだ。フランス人の作品はカミュの「異邦人」も読んだが、細かな感情のニュアンスにときどき違和感というか、引っかかりを感じることもある。やはり日本人の私の感覚とは少しズレる。

本作の特徴として、登場人物たちの動きと同じくらいセシルの感情の描写にページを割かれていて、セシルのいくつにも分裂し、引き裂かれている感情が描かれている。表面上はアンヌを父から引き離すような計画を進めながらも、心の中は混沌としている。

読み間違えている点もあるのかもしれないが、セシルがアンヌに対して抱く嫌悪感、拒否感とともに親近感(努めてそう思おうとしているのか?)が心のうちに同居しているアンビバレントさがなかなか表現しにくい人の感情をリアルに表現していると言える。

舞台はおそらく 1950 年代の南仏の海辺の別荘で、登場人物たちは上流階級なのだろうか。勉強や勤労といった概念とは無縁のどこか頹廢的な雰囲気のある人たちだ。その中にアンヌという異分子が入ってくることでその心地よさが失われていくのを必死に阻止しようとする主人公セシル。

勤勉や生産性などを至上命題とする価値観に対するアンチテーゼを描いた「ぼくは勉強ができない」に似ているかもしれない。というか山田詠美さんがサガンの影響を受けているのかもしれないと思った。

(おわり)

「悲しみよ こんにちは」感想文

私はセシルの計画はひどいと思うけど、そうしてしまった事に仕方がないとか止められなかったのかもしれないなと思いました。

セシルとレイモン親子の間には独特な関係性が出来上がっていて、そこにアンヌが入ってきたことで今までの絶妙なバランスに変化が起きている事にアンヌも早く作る気付いてあげて欲しかったなと思いました。

それはセシルのわがままなのかもしれないけど…。

アンヌは正しくて、とても素敵でセシルだって一目置いていた存在だけど、レイモンとセシルをアンヌ側の人間になるように望むのは無理があったように思いました。

恋人としての関係だけなら続けられたかもしれないけど、アンヌはレイモンを自分の見方につけようとした所もセシルには面白くなかっただろうし、結局は破綻する運命だったのかも？と思いました。

私が印象に残ったところは

(引用はじめ)

そこでわたしは思った。死によって一またも一アンヌは、わたしたちよりすばらしいところを示したのだ、と。もしわたしたちが自殺するとしたら一その勇気があるとしてだが一父とわたしなら、頭に弾丸を撃ちこむだろう。それも、原因となった者たちの血の気を引かせ、眠りを永遠にさまたげる、説明たっぷりの書き置きを残して。

(引用おわり)

結果的にはセシルの計画は成功したのかもしれないけれど、アンヌには敵わなかったし、これからも勝てる機会を一生逃してしまった事のように感じました。

私は嫌いではないけど、あの夏に起こった悲しい出来事を時々思い出して、でも前向きに生きて行くセシルはすごいとも思うし、怖いとも思いました。

(おわり)

「悲しみよこんにちは」感想文

この話を読んで、数年前、ラジオの「人生相談」という番組の担当者が「自由を奪われると、人はその人を憎むようになります。」と言っていたのを思い出しました。

主人公のセシルは正にその通りで、アンヌに対してこの感情を持ちました。そして二人の攻防が続き、最終的にはセシルに軍配が上がりました。この物語は「人は神から作られたものではなく、自分で作るものである。」というフランスの自由主義の話だと思います。「自由」は話のテーマになっていることが今も多いので、「自由」は人間にとって永遠の課題だと思いました。

私も「自由」は人権の中で一番大切な権利だと思います。けれども環境によって自由は制約を受けます。年齢で考えた時は、健康であれば一般的には子供、学生、退職老人は家庭を持ったり働いている大人たちより自由なはずですが。そしてセシルの年代は最も活動的で意欲的な年代なので、セシルが自由+刺激を求めるのは私もよく分かります。この年代の者にとっての束縛は辛いと思います。まして愛する父まで引き離されてしまうセシルには耐えられない出来事でありアンヌを憎むのも理解できます。

人間は人種、宗教、家庭、病気、お金、仕事、などの環境で束縛を受けながら 毎日を生きています。その環境で起きている束縛に気が付かずに生きていることもあるし、束縛に慣れてしまえばもっと自由に生きられることを忘れてしまうこともあると思います。

また自由を与えられた時には「責任」というやっかいな義務が付いてきます。これを避けるために束縛を選ぶ場合もあります。意思決定に自信がなく、事なかれ主義の人間はこうなりがちです。私もそうでしたが、幸い読書会で哲学や政治、世界の歴史、現代の問題などを学習したおかげで多くの知識を得、判断力がついてきて、自由の問題にもどうすべきか自分で決める自信がついてきました。

物語に感想を戻しますが、私はセシルが勝利したにもかかわらず、最後の場面でアンヌを偲んでいるのが心に引っ掛かりました。これはアンヌを死なせてしまったことへの詫びばかりでなく、自由主義で生きることの大変さ（責任を持つのは大変だ。神に判断してもらって生きた方が楽だ。）をセシルが、（作者も）感じているのではないかと思いました。だから題名も「悲しみよ さようなら」ではなく、「悲しみよ こんにちは」なのかなと思いました。

最後に、p71 に書いてあるベルクソンの文章の意味が分からなかったので、教えて頂けると嬉しいです。宜しく願います。

(おわり)

★悲しみよこんにちは★

主人公のセシルは、修道院私立学校の寄宿生として《非常に厳格な道德教育》を受けたと言うことが病氣的に自由を求めたと思われます。

そして、レーモンは（愛する）妻を亡くし、仕事と子育ての両立ができなかった、その埋め合わせの愛情が、娘と父という関係より、（近親愛に近い）遊び友達、共犯という関係だったのでしょ。

頭のいいセシルは自分の思春期が終わってしまうことに気づき、今自由 (free care) に生きなかつたらいつ可能なの？ と問う。

セシルは知らぬ母の友人であったアンヌの様に高貴な感じの女性になりたいけれど今の自分にはまだ無理、今は自由奔放に生きたい。

大人になれば、偽善でピュリタニズムな社会に入らなければならないのよ、もっと伸び伸びと思春期を楽しみたいわ。

その為には父レーモンを奪うアンヌが邪魔、意地悪してやろうぐらいのゲームが、何にも動揺されなさそうに見えたアンヌを傷つけてしまった。

わかっていながらのセシル、どう片付け様も無いこの年頃の心理状態、南仏の蟬が鳴く強い日差しの下。。。にもがくセシル、罪悪感を胸に抱き生きなければならないセシルがとても愛おしく感じられました。

アンヌの事故死の悲劇的ファイナルもサガントーン。

サガンはリズムと悲劇が無い小説は面白く無いと言っています。

当時この本はバチカンが信者に読書を禁じたそうです。

バチカンと頭の固いモーリアックの批評のお陰で売れ行きが増したらしいです。（数年後 1967 年モーリアックはまだ 20 歳の未成年の孫アンヌにゴダールとの結婚を許しています！）

数年後サガンがインタビューでなぜこの本がスキャンダルになったのかを

『恋とも、愛とも、はっきりわかりもしないアドが性関係を持ち、性の快感をも覚えたのに妊娠もしなかった。ということがスキャンダルの理由だったの、何故なら当時この様な阿婆擦れたことをする女性は、妊娠をすることによって罪を受けると言うのが当然と思っていた人が殆どだったからなのよ。』と言っていました。

1954 年フランスの女性は夫の許可なく職を持つことも、小切手（当時そこそこの買い物の支払いには小切手が必要でした）を持つこともできなかったのです。

来年は Mai68 5 月革命 50 周年です。

フランソワーズ サガン、シモンヌドボーヴォワール等の作品が仏女性と仏社会を変える大きな踏み台となりました。

今日のフランスの名作家ミッシェルウールベックも社会を見る眼がサガンと同様鋭いです（彼もお酒とタバコが好き）

二人のこの共通点は、思春期に沢山読書し自分で消化してきたことにあると思います。だからフランソワーズも 18 歳（一ヶ月で）という若さでこの作品が書けたのでしょ。

（おわり）

『悲しみよ こんにちは』 読書感想文

12 ページ

「気に入られること以外、私たちは何を求めているのだろう、わたしにはまだわからない。ひとのこころを勝ち取りたいというこの気持ちの裏にあるのが、旺盛すぎる生命力や支配欲といったものなのか、それとも、自分自身について安心したいという、ひそかな、言葉にはされなくとも絶えることのない欲求なのか。」

この記述を読んで、

《自分を助けられるのは、自分自身だけなのに、積極的に他人と関わろうとするのは、どこか無意識に他人を食い潰そうとしているのか？自分のさみしい気持ちを埋めて欲しい時、他人を求め相手の何かを奪う事で満たされるのなら、いっそひとりでいたいとおもうのに。

わたしは他人が失敗した時、どこかほっとしてしまう。そうゆう自分がとても嫌です。わたしの個人的な事なら問題は無いのですが、もし人間全般の事なら悲しいことだし、虚しすぎます。そうゆうデリケートな気持ちの問題、自分自身の事もわからないのに、他人の事もわかるはずがありません。

よくよく、考えたらそうゆう空間にポーンと放り出され、『絶対』が何なのか判らないまま毎日を過ごしています。ほんとに恐ろしい》

漠然とですが、自分がずっと思いつづけてきた、このような事が思い巡らされました。

物事に輪郭、言葉に意味をもたせ、趣味のよさや洗練に自分なりの規範があり、それを周囲にも無言の圧力で守らせようとするアンヌは、出迎えの花束を愛人に持たせかねないと娘が杞憂するくらい鈍感なセシルの父親(40歳)に何を求めて、のこのこやってきたのか？命まで落としているので、やるせなくなります。

上手く説明できませんが、セシルの視点、アンヌの視点。どちらの視点も持ち合わせているとすると、生きていくという事が、とても恐ろしい事だと思いました。なんせ恐ろしい小説だと感じました。

(おわり)

『セシルへ』

いつか、私はあなたにこう言いました。「あなたがたには少しいらさらされるわ。お父様とあなた…『私たちは何も考えない…大した事にも役立たない…何も知らない…』 こういうふうで満足しているの？」

なぜ私がお父様と一緒にたかったか、あなたには疑問でしょうね。たしかに私は、もう 15 年も前からお父様を知っていたから、放蕩や女好きも覚悟していたし、2 年前にお父様の元を去ったのもそれが原因だった。

あなたは、お父様の孤独に気づいてますか？お父様は自由な人だけど、もうこのままの暮らしぶりでは生きていけないと、そう悟っていた。あのカジノの晩に、車で私たちは言葉と愛撫で確認し合ったの。私は、お父様に触れたその瞬間に、疲れやわだかまりが解け、解放された。とろけそうな瞬間だった。

あなたがシシルに覚えたように、お父様と奏でる肉体的な癒しに、私は負けたのかしら？ いえ、そうではない。そんなふうには思われたくない。

実のところ、あなたのお父様の、生活のリアリティに私は救われていたのだと思う。あなたがたの遊びや消費の生活を軽蔑しながらも、一部、自分にも取り入れることは不思議と違和感がなかった。タバコやつけっぱなしのステレオは多少遠慮して欲しいこともあったけれどね。一緒に生きていく相手ができた喜びには代えられなかった。あなたもセットよ、セシル。私はあなたのお父様も、あなたのこと、同様に認めたかったし、愛そうとした。あなたには迷惑だったと思うけれど。

たしかにお父様を見下していたことも否定はしない。ここが、肝心ね、セシル……。結局、私はあなたとお父様を、わたし流に仕立てあげようとしてしまった。本当はそんな自分を心の奥底から憎んでいたにもかかわらず。気づいていながら、それをどうしてもコントロールできなかった。そんな自分に絶望していたのよ。

あの日、お父様があの女といるところを見たわ。何かがガラガラと崩れていくのを感じた。そんな自分が惨めで仕方なかった。お父様の過ちを恨み、それに耐えきれない自分にも嫌気がさしたの。

私は結局この世に生きる事に意味を見出せなかった。

押し留められない……。！暗い、暗い淵に、吸い込まれたい欲動に！！

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『アラフォー-belouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

『 悲しみが通り過ぎたあとに 』

セシルの年頃を随分と過ぎて、この小説に出会い、思わぬ追体験をすることになった。

もちろん、この小説と同じではないが、焦燥感や他人と自らの比較、自尊心や優越感の芽生え等が一気に押し寄せ、自らの17歳もヒリヒリしながら過ごしていたからだ。

年齢を経た今回は、どちらかというアンヌ目線だ。読み進めると、やはり完全な人間なんていないと思知らされる。アンヌのような規範的なモラリストでもだ。人間は、自らに足りないピースを持つ人間と惹かれ合い、完全を目指す。

アンヌには、一見合わないセシル親子が必要だった。自らの持つ規範的な性分が光るのは、相手が墮落しているからだ。セシル親子も、享乐的な生活を見直すにはアンヌが必要だった。しかし、レイモンには失った「若さ」というピースを補うために、アンヌを裏切ってさえもエルザが必要だった。それが、悲劇の引き金になってしまう。

セシルはアンヌを受け入れたのにも関わらず、反発心を強め、後に取り返しのつかない計画を立てる。アンヌ自身への反発というより、アンヌに簡単に懐柔された同じ世界の「永遠」の共犯者だと思っていたレイモンに対する反発だと思うのだ。アンヌを通して、父の裏切りを見つめていたように思う。だから、アンヌへは思慕の思いもありながら、父と引き離す計画を嬉々として進めてしまう。その計画は、アンヌの死をもって終わりを告げる。セシルにとっては、初めて経験する「悲しみ」の感情を受け入れるしか前に進めない。アンヌの残した一番大きな教育は、セシルが「悲しみ」を敬うべきものとして「こんにちは」と受け入れることができたことかもしれない。

今は、「悲しみ」の中に耽溺できても、いずれ「悲しみ」は通り過ぎる。その時に、何が残っているのだろうか。愛していると思つたシシルは、肉体的快樂だけだった。親しいエルザも用無しだった。やはり、セシル自身が事故後に感じた「後悔」の感情だろうか。私も、自らが通り過ぎた青春の後には「後悔」が堆積している。でも、「後悔」がなければ大人になれない。年齢を経た今ならわかる。

私が以前耳にして以来、メロディが好きで今でも口ずさむ曲がある。

薬師丸ひろ子が歌う「メイン・テーマ」だ。その中の一節がセシルに重なる。

「愛ってよくわからないけど 傷つく感じが 素敵
笑っちゃう 涙の止め方も知らない 20年も生きてきたのにね」
(作詞・松本隆)

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

「自由ではない愛は無力だ」

〈事実と原因のあいだに、まずはどれほど異質性を見出すことができようと、また、たとえ行動の規範と事物の本質に対する言明とのあいだに大きな隔たりがあろうと、人が人類を愛する力を汲みとれたと感じるのは、つねに人類の発生原理に接してのことである〉(P71)

セシルが、頭を悩ませたベルクソンの一節である。私なりに解説してみたい。

レイモンとアンヌの再婚の事実は、アンヌに原因している。享楽主義者レイモンは、落ちついた中年の生活など本当は望んでいないが、結婚を望むアンヌに言いくるめられてしまった。また、アンヌの行動規範(知的で趣味の良い幸福な家庭生活を維持する規範)とレイモンやセシルの本質(自由を求める性格)には、大きな隔たりがある。

アンヌの愛は、レイモンやセシルを支配し、コントロールしようとする欲望だ、とセシルは感じている。「人類の発生原理」とは、ベルクソンの哲学ではく自由である。だから、自由からしか愛の力は生まれない。アンヌの愛は、自由と両立していないので、セシルは、愛の名を借りたアンヌの束縛に反発する。

(引用はじめ)

あの人は、わたしが自分自身を愛せないようにしてしまう。幸福や、愛想のよさや、のんきさに、わたしは生まれつきこんなにも向いているのに、彼女がいると、非難や良心の呵責のなかに落ち込んで、心のうちでしっかり考えることもできなくなり、自分を見失ってしまう。(P.72)

(引用おわり)

アンヌはセシルを型にはめ、彼女の自己愛や自由を奪おうとしている。

人生を享樂し、自由を追求するのが、この父娘の生き方であり、彼らの生命の根源的な推進力だ。

一方、アンヌは、心の底では自由を恐れている。表面上は、知的で洗練されてはいるが、彼女は、自由から逃げようとしている。この父と娘を制圧して、それを愛だと信じ切っていた。

それを、セシルの生命が拒んだ。

「自由ではない愛は無力だ」という悲しみを描いた小説かもしれない。

おばあちゃんのように走るアンヌ。自由ならば、愛に力があれば、そんな走り方しないのでは。

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343